



## 東北ボランティア活動を終えて

工事部 末永 智久

現地に向かうまで、東日本大震災をニュースのみの情報でしか考えておらず、正直なところ他人事でしかありませんでした。実際に見て、歩いた現地の状況は、普段生活する上での必要なものが何も無い、ただの広い空地でした。今まで当たり前だった家や職場、学校が一瞬にして無くなる感覚、自分を支えてくれている人が居なくなる感覚を想像することができました。これから先どう生きていけばよいのか、絶望的であろう状況の中で自衛隊、警察、ボランティア団体による支援が人々に最低限の暮らしができる状況を作っていました。

土地に詳しいわけでも、復興がどこまで進んでいるかわかっているわけでもない自分達に出来ることは、長い期間ボランティアに携わっている方の指示通りに動くことでした。2日間で膨大な量のヘドロのほんの一部を減らすことはできたけど、完了するまでにはまだ何年掛かるかもわかりません。毎日人々が繋がりながら協力し合い、少しずつの作業の繰り返しによって、大きな復興に繋がるのかなと思いました。

当たり前に生活できていること、周囲の人々が支えてくれていること、会うことのない間接的な協力者にも日々感謝し、助け合うことを常日頃から大事にしていきたいです。

実際に現地に向かい、状況を知ったことで人の立場になって深く考えること、その時にどうしてもうらうと相手は助かるのか、喜ぶのかを考えることの大切さを学びました。仕事においても相手の立場に立つことで、どのような状況になってしまっても対応できる準備をする力や、より良い結果が生まれることに結びつくと思いました。この事を意識して、これから仕事を役立てていきたいです。今回このような機会を与えていただきありがとうございました。